

ゲルマニア会 2016 年春季世話人／有志の会：

懇話会 『 あるドイツ・ユダヤ女性の見た現代世界

—いま日本で ハンナ・アーレントを読むということ—』 に参加して

5 月 14 日、ゲルマニア会の世話人会が開催された。この「懇話会」は毎回非常に sophisticated された内容になる。今回のテーマはハンナ・アーレント論。

講話者はアーレント研究の第一人者、矢野 久美子氏。昭和 62 年(1987 年)にドイツ語科を卒業され、現在はフェリス女学院大学国際交流学部で教鞭をとっておられる。昨年、岩波ホールで上演されたアーレントの映画が静かなブームとなり、また 12 月には矢野教授のインタビューが朝日新聞に掲載されたことから、幹事らが講演を打診したところ、快諾してくださった。

ハンナ・アーレントは、20 世紀を代表する政治哲学者。1906 年ドイツ・ハノーファーに生まれ、バルト海沿岸のケーニヒスベルク(現在はロシア領)で育つ。1920 年代にマールブルクやハイデルベルク大学等で哲学や神学を学び、ハイデガーやヤスパースに師事。1930 年代始めはベルリンなどで研究生活を送っていたが、ユダヤ人であったため 1933 年にパリに亡命。しばらくはパリで、シオニスト組織で働いていたが、1940 年にアメリカへ亡命し、その後は、アメリカを拠点に活動した。

このアーレントという人物、理解が一筋縄ではいかない。

ユダヤ人中流家庭に生をうけ、祖父母とシナゴークに礼拝に行く一方で、両親の友人から社会民主主義の薫陶を受け、そうかと思えばキリスト教徒のベビーシッターと日曜学校に参加するなど文化・宗教の混交する環境で育った。

大学に進学してからは、指導教授のマルティン・ハイデガーと程なくして恋に落ちている(不倫関係)が、ハイデガーの妻は反ユダヤ主義者。そして、ハイデガー自身も、後(1933 年)にナチスに入党している。

18 歳の時に尊敬する教授と恋におちたのは良い(?)としても、一般には理解しにくいのがその後の行動。第二次大戦後、1950 年と 52 年に訪欧した彼女は、わざわざハイデガーと再会しているのである。しかも、ナチス関与の責任を追求しようとする人々から(その件はひとまず置いて)ハイデガーの思索の価値を擁護しようとする。元カレに対する女性のありがちな感情といえば、週刊誌ネタとしてはうけるが、そういうレベルで論ずべき人間ではない。また、「ユダヤ人」であることに重きをおいていなかったかと言えば、それも違う。親しい友人は彼女を deutsch-jüdische Amerikanerin (ドイツ・ユダヤ系アメリカ人)と呼ぶこともあった。そんな彼女のアイデンティティを「抹殺」するような暴挙の限りを尽くしたナチスを積極的に支持した人と会い、その思索の価値を弁護する、なかなか真似できる芸当ではない。

また、映画でも描かれ、アーレントを 20 世紀を代表する政治哲学者に高めた反面、彼女を非常に悩ませたアイヒマン裁判の傍聴記。彼女は 1933 年にドイツを出国しナチの全体主義をじかに経験せずニュルンベルク裁判も見ることがなかったことから、「生身のナチ」を見て考えることが過去に対する自分の責任と考え」（矢野教授著「ハンナ・アーレント」中公新書より）、わざわざイスラエルまで出向く。そして傍聴記を記すのだが、その中でアイヒマンを「凡庸な男」と評し、また、ナチスに協力したユダヤ人組織の存在も明確に記述した。アーレントとしては、「“ふつうの人”を殺人マシンに変身させる全体主義のマジック」「思考停止して集団に帰属する怖さ」という彼女の感得した事実を実直に表現したのだろうが、アイヒマンを「怪物的な悪の権化」として断罪し早々に処刑することを望んでいたユダヤ人社会は猛反発、彼女はユダヤ人同胞から徹底的に糾弾され、孤立してしまう。

“アーレントは、生涯を通じて、一枚岩になった集団と個人との相克を、肌で感じ続けた人であったのです”と矢野教授は指摘する。

このようにアーレントは、生き立ち、勉学や学究活動、自己の生きた社会、時代のすべてに大いなる矛盾をかかえていた。アーレントについての矢野教授の説明は平易で明確なのだが、それでも思考が引き裂かれるかのような居心地の悪い感覚に陥った。これは、ひとつの精神的支柱に依拠することはもはや不可能な現代社会では避けて通れない感覚らしい。“アーレントは、そのことを「手すりなき思考=Denken ohne Geländer」ということばで表現しています”と矢野教授。

しかし、それが現代人の宿命としても、「手すりなき思考」を展開することは、何とも不安が募る。そこで重要となるのが、一人一人が自立的に考えることのようなのだ。矢野氏は、アーレントから「思考は職業的哲学者の特許ではない」ということばを引用する。そして、著書「ハンナ・アーレント」のあとがきで、“アーレントの思想を教科書とするのではなく、彼女の思考に触発されて、私達それぞれが世界を捉えなおすこと”が肝要であると指摘する。続けて、“考え始めた一人ひとりが世界にもたらす力を、過小評価すべきではない。”と説く。

翻って私達の「いま」を見つめなおしてみると、2015 年は戦後 70 周年の節目の年であった。日本でも、第二次大戦についていろいろと記念行事が行われたが、どちらかという、東京大空襲やヒロシマ・ナガサキについて〈被害者〉の立場からの情緒的回顧が主流だった。〈ナガサキ〉を表層的に扱った駄作映画もムードにのって日本アカデミー賞を複数部門で受賞。

他方では、安保関連法案が多くの反対を押し切って国会を通過し、いよいよ「不戦の誓い」が怪しくなってきた。社会的には、〈事実〉を厳格に多面的に検証することなしに、情緒的ムードに流されて一つのスローガンのもとに丸め込まれていく、「懲りたは

ずの」全体主義の芽生えが感じられる。

このような、アンビバレンツをどう理解したら良いのか、手がかりが得られず宿題を抱え込んだままだった。

だが、このアンビバレンツ、第二次大戦を経験した親から生まれ、その歴史を受け継ぎ、さらに精神的支柱が崩壊して一層世界が複雑になった“いま”を生きるすべての人が抱えているものようだ……

そして、この厄介な状況を検証し、理解し、自分のことばで語るためのヒントを、矢野教授のアーレント論のなかに見出したような気がした。(了)

報告者：大塚美絵子 (D1984)